



みくびぎたより

平成19年12月1日発行
御首神社社務所

御挨拶

拝啓 師走の候、皆様方に於かれましては愈々ご健勝の事とお慶び申し上げます。

去る十月初旬、天皇陛下におかせられては、皇居内にて稲をお刈り取り遊ばされました。この稲は、今春皇居内で御親ら種をお蒔きになり、お田植えなさって育てられたものであります。

昭和天皇がお初めになられて以来、そのご意志を受け継がれ、今上陛下には毎年春にお田植え、秋には稲刈り遊ばされています。

又、例年収穫されました稲は、伊勢神宮の神嘗祭に根付きのまま奉られるほか、宮中の神嘉殿での新嘗祭に供えられております。

稲は天孫降臨の際、天照大御神が瓊々杵尊に授けられた貴重な食糧で、肇国の精神を天皇御自らお示しになつている大御心は崇高であり、誠に有り難き極みであります。

さて、第六十二回伊勢神宮式年遷宮の奉賛活動が全国的に進められて中、当社におきましても今回の式年遷宮が麗しく執り行われますよう、御奉賛賜りたくお願い申し上げますと、多数の方々の赤誠を頂きました。ここに厚く御礼申し上げますと共に、引き続き奉賛活動にご協力賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、御首の大神様の御神徳を漏れなく拝受され、益々の御健勝とご多幸を祈念いたしまして御挨拶とさせていただきます。

宮司 三浦 篤

天の岩戸開き

(古事記より)

「こんなまつ暗な日がつづいたら大へんなことになるぞ! どうしたら天照大御神に天の岩戸からでてきてもらえるのかなあ?」八百万の神さまは急いで話し合いをすることにしました。その中に思兼神という頭のよい神さまがおられ、ニワトリをたくさんあつめさせ、天兒屋命と天手力男神と天宇受売命を呼ぶようにいわれました。

そして天兒屋命は祝詞(神さまへの手紙)を読み上げ天宇受売命はおもしろく踊り、他の神さまは楽しそうに



わらったり手をたたいたり、天手力男神は岩戸のすぐそばに、こっそりと隠れるよう命じられました。

「さて、よういができたなら始めましょう。」と思兼神さまが言われると、まず一羽のニワトリが「コケッコッ」と鳴き、つづいてたくさんさんのニワトリがぎやかに鳴きだしました。天宇受売命は桶を逆さにしてその上のにり頭にはツル草をまき、ささの葉を手にもっておどりはじめました。おどりはだんだんとはげしくなり、八百万の神さまは盛んにはやしたて、手をたたいたりしてみんながアハハ・オホホと面白そうに笑っています。

この声を聞かれた天照大御神はふしぎに思い、岩戸を

そつと細目にあけて、「私がかくれていて外はまっ暗なはずなのに、なぜたのしそうに歌ったり踊ったりしているのでしょうか？」と言われました。

そこで天宇受売命はおどりをやめて、「ここにはあなたさまよりりっぱな神さまがお見えになるので、私たちはうれしくて歌ったり踊ったりしているのです。よろしかったらそのお方をおつれしましょうか？」と申しあげて鏡をさしだし、天照大御神の顔に近づけました。それを見られた天照大御神は自分の顔が映っているとは知らずにハッ！とおどるき、「？ふしぎなこともあるものねえ…もう少しよく見てみましょう。」と行って岩戸を少しあげ、外のようすを見ようと体をのりだしたそのときです。今か今かとまちかまえていた力の強い天手力男神が「ゴロゴロゴロッ」とおもいつきり岩戸をあけ、天照大御神の手をとって外へつれだし、その岩戸の前に縄を張りめぐらして、「これより中へは二度とお戻りにならないで下さい。」と申しあげたのです。すると高天原も地上もいっぺんにあかるくなりました。

八百万の神さまはみんなそろって、「よかった・よかった」と大よろこびです。おかげで草木も元気をとりもどし、ふたたび小鳥たちもうつくしい声でうたいはじめ、平和がもどってきました。 つづく



おとうさん、おかあさん、おじいちゃん、おばあちゃんへ！

今回の「天の岩戸開き」は天照大御神の岩屋戸の神話をもとにいたしました。この物語は古事記の中でも特に知られている話で、神道の「まつり」の原型を分かり易く表現したものであります。

古代の人々の信仰の様子がよくうかがえる物語りですので、是非お子さまやお孫さまに読んでいただき、我が国の祖先から受け継がれてきた心との出会いをお楽しみ下さい。

神宮式年遷宮とは？

伊勢神宮に於ける式年遷宮は、二十年に一度宮地を東と西の敷地を交互に改め、古式のままに外宮・内宮を始め、摂社末社合わせて百二十五社に至るまで総て神殿を造り替え、御装束・神宝も総て新しく調製して大御神に新殿へお遷りいただく、神宮最大の儀式であります。

「式年」とは、定められた年という意味で、「遷宮」とは、ご神体を移すということであり、ます。

建築様式は、唯一神明造りと呼ばれてひのきが用いられ、柱は円柱の堀立式で屋根は切妻造りで萱葺き、棟の両端を棟持柱で支える形をとり、弥生時代にまで遡る、高床式穀倉の伝統的な様式を今に伝えています。

「御装束」とは、正殿の内外を装飾する御料のことで、一千点以上とも言われ又、「御神宝」とは、調度の品々で約五百点にも及ぶと言われています。

遷宮の制度は、第四十代天武天皇(六七〇)が定められ、第四十一代持統天皇(六九〇)の御代に初めて行われました。以後、室町時代後期に一時中断された時期もありましたが、これまで二十年毎にほぼ繰り返しおこなわれ平成二十五年に第六十二回が行われます。

それでは何故二十年に一度かと言いますが、主に次の四つの説が考えられます。

神宮の社殿は素木づくりで、屋根も茅葺

きのため、常に尊厳な姿を保つ為には二十年を限度とする説。

造営にあたって、宮大工や神宝などの調製の伝統技術を次世代に継承するには、二十年が最も相応しいとする説。

旧暦では二十年に一度「朔旦冬至」といつて十一月一日と冬至が重なり、そこで原点に返るとい説。

古代での日本の経済を支えた稲の貯蔵年限を定めた倉庫令(古代の基本法)によって二十年に一度伊勢神宮を初め、古代の多くの神社が式年を定めたという稲貯蔵年限説。

これらの諸説は、いずれもその根底に日本の文化・伝統と、神宮の式年遷宮の制度とが強く結びついているのがわかります。つづく



御首神社ホームページ

神職への質問FAQ

当神社ホームページへのお問い合わせは六百件を越えております。中でも、神棚に関するお尋ねの占める割合は大変多いようです。

今回は、『神棚に関するお尋ね』を紹介いたします。

問 神棚の神を毎月一日・十五日に新しく取り替えておりますが、一週間しかもちません。本来どのように神を扱うべきですか？

答 各ご家庭に於いて日にちを決めて神を取り替えて頂くことは、大変良いことです。

神は、常に青々とした状態が好ましいです。枯れかけましたら適宜、新しい物に取り替えて頂くことをお勧めいたします。

問 実家に神棚が二つあります。お祀りしてまず神さまのお名前は、わかりませんが、一緒にお祀りしてはならない組み合わせがあるということでしょうか？

また、神棚が二つある状態をこのままにしておいても良いのでしょうか？

答 本来ですと、一つの神棚（宮型）に神様一体をお祀りすることが理想ですが、実際は場所などの問題もあり、一つの宮型（三社）に複数の神様を合わせてお祀りされております。その際に、良否を問われるような組み合わせ

わせは無いと思いますが、その土地に伝わる習慣などあれば仕方ないと思います。

複数の神棚（宮型）については、それぞれ大切にお祀りするお気持ちがあれば良いと思います。

問 新居を購入いたしましたので、神棚を設置しようと思います。自分達で神棚を設置してお札を入れればよいでしょうか？

答 新居に新たに神棚を設置されるのであれば、やはりお近くの神職に依頼されまして、入居のお祝いを兼ねて神棚新設のお祝いをされた方がより丁寧かと存じます。

問 友人からお寺のお札をいただきました。神棚と一緒にしても良いでしょうか？

答 神社のお札さまと寺院のお札さまは一緒にお祀りすることはお避けいただいたほうが良いかと存じます。寺院のお札さまのお祀りの仕方は寺院にお問い合わせ下さい。

問 事情があり、神棚を処分することになりました。どのように処分したらよいのでしょうか？

答 神棚の処分（返納）の仕方についてですが、今までお守りいただいた感謝の気持ちを込めて、近くの神社の神主さんをお願いされて神棚返納のご祈祷をしていただくと良いでしょう。又、神棚に納められているお札様については、お札を受けられた神社にお返しするのが一番良いのですが、どうしても無理な場合は年明け（一月中旬から二月中旬にかけて）に神社で行われます左義長神事にてお焚

き上げされるようお勧めいたします。

問 身内を亡くしました。年末年始の神棚はどのようにお世話したらよいのでしょうか？

答 一般的に身内の方を亡くされた時には、神棚の前面を白い紙か布で覆い、五十日を過ぎるまでは、

お供え・御札の入替等一切のお世話を控えて頂きます。

尚、お正月が過ぎましても御神札を用意しておりませんのでご遠慮なく社務所受付までお申し出下さい。



纏め 今回は神棚に関するお尋ねと題し、特別にお世話の仕方・設置に関するお尋ねを抜粋し、紹介させていただきました。細かい点まで含めると、かなりのお尋ねが寄せられて居るのが現状であります。神棚に関して疑問をお持ちの場合は、気軽にお尋ね下さい。

また、特に地域性を問われる場合は、お近くの神社の神主さんにもご指導を仰がれまして、各ご家庭の神棚（宮型）のお世話を積極的に行われ、神様の益々の御守護をいただかれますようお願い致します。

祭事報告

西宮神社例祭(相殿) 七月十七日午後三時

末廣稻荷神社例祭 八月五日 午後三時

夏越大祓 八月五日午後三時半

当日は猛暑にもかかわらず、多数の参拝者が参加され、日々知らず知らずのうちに受け犯している罪や穢・災厄を被い清める大祓神事を齎行いたしました。

神事を終え、続いてお祓所役を先頭に宮司以下祭員・総代・役員・参列者の順に左右左と茅の輪をくぐり、最後に拜殿前に進み二礼二拍手一礼にて拝礼をし、神事は終了いたしました。



長寿祈願祭 九月十五日 午後四時
神明神社例祭 十月十七日 午後三時
七五三参り 十一月一日～三十日



かつて、医療の発達してない時代には、三歳・五歳・七歳という年齢を無事迎えられることは大変な慶びでありました。七五三参りは、その慶びと感謝の気持ちを神様に申し上げ、これから先の健やかな成長を願うものがあります。七五三は、一般的には数え年で参拝されますが、近年は数え年に限らず、満二歳から七歳の間に、ご祈禱を受けられるお子様が増えています。

崇敬会大祭 十一月 三日 午後二時
新嘗祭 十一月二十三日 午後三時

崇敬会入会のご案内

入会の方法

御首神社の御神徳に感謝し当社を崇敬される方は、どなたでも入会出来ますので御参拝の折、社務所にお申し出下さい。尚、郵便にても受付出来ますので、申し込み用紙を御請求頂ければ、お送りさせて頂きます。お申し込みされますと、神前にて入会報告祭が執り行われ、会員証・認定状等が交付されます。

会費(年会費)

- 一、個人会員 三千円以上お志し
- 一、家族会員 五千円以上お志し
- 一、特別会員 一万円以上お志し
- 一、法人会員 二万円以上お志し
- 一、名誉会員 三万円以上お志し

会員の特典(抜粋)

- 一、神前にて入会報告祭が執り行われます。
- 一、誕生日には特別祈禱が行われ、神符が授与されます。
- 一、春の例大祭・秋の崇敬会大祭にはご案内申し上げます、大祭特別祈禱神符及びお供え等が授与されます。
- 一、夏越・年越大祓にはご案内申し上げます、ご祈禱致します。
- 一、参拝の折、会員証を御呈示になられますと、会員の方は昇殿参拝が許されます。

祭事案内

年越大祓 十二月三十日 午後三時



当社では、皆様方からお預かり致しました半年間の罪穢を託された人形（ひとがた）を大祓神事の忌み火にてお焚き上げ致します。同封の人形を社務所までお持ち頂くか、郵送頂ければ

お焚き上げさせていただきます。
 元旦祭 一月一日 午前0時
 新年を迎え、国の隆昌と世界の平和又、氏子崇敬者の繁栄と幸福を祈り、斎行されます。
 左義長 一月十五日 午前10時
 御神札やお守、お正月の注連飾り等をお焚き上げる神事でありませす。
 皆様方がお持ちになった御神札・お守り・注連飾縁起物等は、左義長神事終了後に各自でお焚き上げ下さい。
 尚、お餅やみかん等の燃え尽きにくい物は、持ち帰り頂きますよう、お願い申し上げます。

淨火祭 二月三日 午前10時

皆様が願いを託し、奉納されました帽子や絵馬又、御祈禱の際に御神前に奉って頂きました金幣串や、ご家庭の神棚等で祀られておりました紅白串を、厄男が神事の中でお焚き上げし、願い事が成就することを祈願するお祭りです。

又、この日に限り不要になりました帽子等が御座いましたらご持参頂き、各自お焚き上げ下さい。

尚、不燃物（ヘルメットや金属製の櫛等）や有害物質・異臭の発生する物は、お焚き上げをご遠慮下さい。

祈年祭

二月 十日

午後三時

御鞆神社例祭

三月十七日

午後三時

例大祭

四月二日

午後三時

年に一度の大祭で、氏子の子

供達による打ち囃子の奉納や、子供御輿のご

巡幸又、境内では歌・舞等の演芸が催され、

終日賑わいをみせます。

南宮神社例祭

五月 四日

お田植え祭

農休み祭

六月初旬

六月十五日

午後三時



厄除開運祈禱

男子 大厄 二十五歳・四十二歳
 女子 大厄 十九歳・三十三歳

古来より「大厄には諸々の災難、身体の変調のがれ難し」といわれ、年回りに当る方のみならず御家族にまでも災禍が及び何かとままならぬことが多くなります。

前後三年間に渡り忌み慎まなければなりません。厄年に当たる方は勿論のこと、厄年に当たらない方も、日々を平穩に過ごして頂くためにも、一年に一度は厄払いの御祈禱を受けになりますよう、お勧め致します。

平成20年厄年に当る生れ年				
		前 厄	本 厄	後 厄
男子	42歳	昭和 43年	昭和 42年	昭和 41年
	25歳	昭和 60年	昭和 59年	昭和 58年
女子	33歳	昭和 52年	昭和 51年	昭和 50年
	19歳	平成 3年	平成 2年	平成 元年

御首神社社務所

岐阜県大垣市荒尾町一八三三の一
 TEL(〇五八四九一)三七〇〇
 ホームページ www.mikubi.or.jp
 Eメール syanusyo@mikubi.or.jp